

神原文庫所藏清末四川說唱本の興順堂刊本について

岩 田 和 子

一、はじめに

香川大學附屬圖書館神原文庫には、清末民國期の說唱本が三十三種所藏される。そのうちの清末四川說唱本三十種については、すでに拙稿^①にて目録と共に述べているので、本稿では簡単に紹介するにとどめる。

神原文庫は、香川大學初代學長神原甚造（一八八四～一九五四）の舊藏書からなる。神原氏は香川縣多度郡多度津町の出身で、京都帝國大學法學部を卒業後、明治四年（一九一）から京都、大阪、神戸の各地裁判事、東京控訴院判事、大審院判事を務める一方、各大學で教鞭をとり、また大變な愛書家、集書家でもあった。一萬數千冊にのぼる和漢書の中で、これらの說唱本を神原氏がどのような経緯で入手したのか、同文庫に保管される圖書購入覺書や書

店からの請求書、領收書など二百點餘りを調査したが、未だ解明には至っていない。

清代から民國期に出版された四川說唱本については、すでに劉效民による網羅的な研究『四川坊刻曲本考略^②』がある。劉氏は著書で、中國藝術研究院圖書館、四川省圖書館、成都市圖書館、重慶市歷史文獻館、臺灣中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館所藏の二千種餘りの「四川坊刻曲本」（劉氏は、嘉慶年間から一九五〇年邊りまでの四川坊刻劇目を「川劇篇」と「說唱篇」に分けて収録し、「川劇篇」と「說唱篇」を合わせて「曲本」と稱すが、本稿では便宜的に「說唱本」と稱す）に關する目録「四川坊刻曲本知見録^③」を提示し、それらの膨大な資料を基に「四川坊刻曲本書業考」、「四川坊刻曲本書坊録」、「四川坊刻曲本の版本特徵」、「四川坊刻曲本的搜集與整理」、「四川坊刻曲本の價值分析」の項目を

立て、四川における説唱本の出版・販賣、二百三十餘件の書肆の活動状況、版本の特徴について綿密な考證を行い、その文獻的價值、出版業界や戯曲・曲藝の發展における歴史的・文化的・傳統的價值を概括的に述べるが、説唱作品一つ一つの内容に對する分析や、四川および周邊地域の通俗文藝との關わりについては、具體的に研究を進める必要があると考えられる。

四川説唱本の所藏狀況に關して言えば、劉氏が擧げる所藏機關以外に首都圖書館、復旦大學古籍所、上海圖書館や、日本の雙紅堂文庫が中國では特によく知られるが、神原文庫は全く知られていないだけでなく、以下のように貴重な資料が残されていることも注目に値する。まず、劉氏によつて現存數が少ないと指摘されていた、道光、咸豐、同治年間のテキストを十八種確認することができ、また、劉氏の目録と重複しない作品が二十二種あり、それらは管見の限りだが神原文庫のみに現存する可能性が高く、さらに、劉氏が整理した書肆二百三十餘件に含まれない二件が新たに發見されている。

本稿では、神原文庫藏本のうち、この三つの特徴を満たす、より稀少性の高い、同治年間に「興順堂」という書肆

から出版された作品八種と、それに關連する作品二種を中心的に取り上げる。各種テキストや物語内容に對する整理、分析を通して、光緒期以前の四川の民間書肆における説唱本創作・出版活動の状況や、周邊地域の通俗文藝との關わりについて、筆者が湖南説唱本研究から得た知見とあわせて檢證しながら、劉氏の研究成果を補完するとともに、神原文庫の價值を見直したい。

二、興順堂八種と關連作品のテキストについて

神原文庫所藏の興順堂刊本八種の封面と卷末刊記から分る書誌情報は以下のとおり。(西暦は筆者による)

- ① 『五英配』…封面「同治三年（一八六四）是月吉日／五英配／興順堂新刻」、卷首題「新刻杏花樓」。
- ② 『冰霜鏡』…封面なし。卷首題「杏花樓下卷 冰霜鏡」、卷末に「同治二年（一八六三）是月吉日灌邑觀音場劉興順筆」とある。
- ③ 『望月樓』…封面「同治五年（一八六六）是月吉日／望月樓／興順堂新刻」、卷首題「新刻望月樓」、卷末に

「同治五年是月吉日汝山劉興順新做」とある。

- ④ 『金硃縁』…封面「同治六年（一八六七）春正月刻／金硃縁／興順堂」、卷首題「新刻金硃縁」、卷末に「同治六年（一八六七）是月吉日 汝山劉興順 新做」とある。

- ⑤ 『後雙上墳』…封面「同治五年（一八六六）是月吉日／後雙上墳／珍硃印／四十冊興順堂新刻」、卷首題「珍硃印後雙上墳」、卷末に「同治五年是月吉日劉興順筆」とある。

- ⑥ 『仙鶴縁』…封面「同治壬申年（一八七二）編三十五冊／定國珠下本／仙鶴縁／興順堂新刻」、卷首題「定國珠下本全仙鶴縁」、卷末に「劉興順新做」とある。

- ⑦ 『風水亭』…封面「興順堂五十冊新刻／風水亭／同治四年（一八六五）是月吉日」、卷首題「新刻風水亭」

- ⑧ 『陰陽鏡』…⑦と合冊、封面なし。卷首題「風水亭下卷陰陽鏡□□斷案」（□は磨滅で判讀不明）、卷末に「同治四年（一八六五）是月吉日汝山劉興順」とある。

これらの作品は「劉興順」という人物が執筆し、自身の書肆「興順堂」において、同治三年（一八六四）から十一

年（一八七二）を中心に出版されたと考えられる。^①「灌邑觀音場」や「汝山」は書肆の所在地と思いが、灌邑が灌縣を指すのであれば現在の四川省都江堰市に位置し、汝山（一名岷山）は四川省北部に位置するため、^②正確な場所は不明である。また、いずれのテキストも每半葉二十一字十行を基本とし、①～⑥が全四十葉程度、⑦と⑧が全二十葉程度、①と②、③と④、⑦と⑧が上・下巻となる中編作品である。⑤と⑥は共に下巻だが、調査により、⑤は「雙上墳」という作品、⑥は『定國珠』という作品とセットであり、それぞれテキストは興順堂以外のものが幾つか存在することが分かった。以下に筆者が目撃した神原文庫蔵本^③（⑨）と傳斯年圖書館蔵本^④（⑩）の書誌情報を挙げる。

- ⑨ 『雙上墳』…封面「丙午年新刻 四十五冊／閨女寡婦／雙上墳／長興堂」、卷首題「閨女寡婦雙上墳」、卷末に「新刻雙上墳全本卷終 敬惜字紙」とある。每半葉二十一字十行、全三十五葉。

- ⑩ 『定國珠』…封面「挖金銀磚／定國珠／文茂堂藏板」、卷首題「定國寶珠」、卷末に「□興堂刻」とある。每半葉二十一字十行、全二十葉。

⑨の出版年「丙午年」について、神原文庫藏本の封面には「丙午年新刻」の下に「道光廿六」という薄墨の小さな書き入れがあるが、これは光緒三十一年（一九〇六）を指すと思われる。下巻の『後雙上墳』の完成が同治五年（二八六）であるから、上巻も近い時期に興順堂から出版されたと考えるのが妥当であり、加えて長興堂の活動年間も光緒前後から民國期と推定されているためである。⁽¹⁴⁾また、劉興順の名前の記載がないのは、翻刻をくり返す間に削除されていたためと思われる。⑩の出版年は不明だが、「文茂堂」は清末民初に活動した書肆と推定され、⁽¹⁵⁾こちらも⑨と同様、同治年間に興順堂から出版されたであろう。『定國珠』を、後に「文茂堂」が翻刻したと考えられるが、卷末に「□興堂刻」とあるため、他の書肆間で使い回された版木を文茂堂が再利用した可能性もある。

このように同一作品を新たに別の書肆で翻刻したり、書肆間で版木を共有して再利用したりすることは、とくに光緒年間以降の四川説唱本においては一般的な現象だった。芝居愛好家などからの需要の高まりに伴って、低コストで高利益の説唱本の出版・販賣は魅力的な商賣として繁盛し、光緒期から民國期にかけて四川省全域には數百件に

のぼる民間書肆が出現したという。⁽¹⁷⁾彼らに版權の意識がなかった譯ではなく、作品を讀んでいると、卷末には無斷で翻刻する他の書肆への恨みや罵り、注意喚起の言葉が散見する。ただ、版權に關する明確な規定は無かったようで、利益追求に走る數多の書肆は賣れる作品に群がって次々と翻刻し、⁽¹⁸⁾人氣作品となれば省内にとどまらず、周邊地域の書肆でも出版・販賣された。販賣元や作者は實質泣き寝入り状態だったが、⁽¹⁹⁾そのおかげで、當時の内陸部における物語の流行を現在に至るまで把握することができるとも言える。

三、十種の内容

先述のとおり①～⑧は、異種テキストも含めて他機關に所藏がない貴重資料だと考えられるため、關連二作品を含めて以下に詳しい梗概を載せる。ちなみに、これらの作品は、劉氏による分類に従えば「説唱篇」のうち「四川評書」の説唱ジャンルに該當する。

④『五英配』（『杏花樓』（①）と『冰霜鏡』（②））

【梗概】

嘉靖年間、常州宜興縣の竹如山には妻の尼氏、息子の林長と林生、娘の雲英がいる。雲英は錢塘の余欽榮と結婚。竹林長、林生、余欽榮は共に科舉試験に向かうが、途中で嵐に遭い離散する。余欽榮はかつて義兄妹の契りを結んだ女魂の胡香蓮に助けられ、その兄胡成筆のもとに身を寄せる。竹林長は興化縣の木府の庭で發見され、木員外の長女鳳英と婚約するが、次女の蘭英は下女の紅英と謀って密かに自分と姉の紅庚をすり替える。竹林生は賣文で生計を立て、ある日、旅館經營の馬泗奇に見込まれ、娘の鸞英と婚約する。三人はそれぞれ再び科舉試験に向かう。一方、竹如山と雲英は行方知れずの三人を探しに旅立つ。道中で雲英を見初めた松會成が言葉巧みに二人に近づき、従弟の馬子音には妻を娶ったと偽りの理由で籠の調達を頼み、竹父娘を別々の籠に乗せる。途中、松會成は竹如山を毒で謀殺して河に遺棄し、雲英に結婚を迫るが、激しく抵抗され、偶然通りかかった胡筆成によって撲殺されてしまう。従兄の死を聞いた馬子音は安東縣の役所に竹雲英と胡筆成を訴えるが、事件の鍵を握る竹如山の消息が分かるまで裁きは

保留となる。（以上『五英配』）

竹林生が船で科舉に向かう途中、死體が流れて来る。見れば父の竹如山である。救出するとまだ息はある。竹如山は息子に經緯を話して雲英の身を案じ、林生は姉の節義を信じる。科舉は余欽榮が状元、竹林長が探花、竹林生が進士で合格。四人は再會し、竹如山から話を聞いた余欽榮は、雲英の貞節に疑心を抱く。一方、雲英は護送中に状元の一行に遭遇し、新科状元が余欽榮だと聞き、名乗り出て面會を求める。余欽榮はそれを拒絶したが、手紙で竹如山に雲英が捕われている事を知らせたため、父娘は再會を果たす。審議の末、松會成の騙りが明るみになり、雲英と胡筆成は釋放されたが、疑念の晴れない余欽榮は、馬子音から松會成と雲英は婚姻關係にあったと聞き、離縁状を書く。竹如山と雲英は離縁状に怒り泣き、尚方寶劍を所有すると噂の蘇州府の沈部堂に訴える。沈部堂は余欽榮を呼び出し、雲英を「冰霜鏡」で照らして奇跡を起こし、純潔を證明した。一方、木府では竹林生に鳳英ではなく蘭英の紅庚を渡していたことが發覺し騒然となるが、兩人と結婚することで話がまとまる。また、「冰霜鏡」の奇跡は皇帝の耳に入り、稱えられ、余欽榮は竹雲英、胡成筆は木府の下

女の紅英、竹林長は木鳳英と蘭英、竹林生は馬鸞英と結ばれた。(以上、下巻『冰霜鏡』)

③『望月樓』④と『金硃縁』④

山東省泰安府東平州の段中祥には妻の蘇氏、娘の金平・銀平がいる。金平は青州府樂安縣の卞松亭と結婚を約束していたが、卞府の零落を機に、嫌貧愛富の段中祥は約束を反故にする。卞松亭は思松亭と名を変え、段府に庭守として入り込み、中秋節、望月樓で月見をする娘たちが詠む詩に唱和して自身の正體を明かす。その學識の深さに心打たれた金平は母親と相談し、金獅墜を渡して證とし、狀元になるまで待つことを誓う。ところが段中祥は金持ちの詹廷芳との結婚を決め、金平の紅庚を渡してしまう。それを知った金平は庭守の正體を話して父をなじるが、却って卞松亭は不義と竊盜の罪で訴えられて死罪となる。裁判官は卞松亭を憐れみ、甥の白歩雲を補佐に密かに釋放する。卞松亭は白松亭と名を変え、兗州府に向かう。一方、金平と銀平は卞松亭の刑死を聞き、絶望して河に身投げしたが、敘州から兗州府の任に向かう皮學臺に救助され養女となる。さて、任を終えて敘州に戻った皮學臺一家は、甥の皮

登雲が兗州府の南江書院で白松亭すなわち卞松亭と出會っていたことを知る。金平は代書人に頼んで手紙を届けてもらうが、途中で詹廷芳の手にわたり、讀めば卞松亭は白松亭と名を変えて生きており、金平と結婚するには證となる金獅墜が必要とある。詹廷芳は手紙を書き換えて卞松亭に近づき、藥で謀殺して河に遺棄し、金獅墜を奪い取り、徐州府の皮府へ向かう。(以上『望月樓』)

卞松亭は川邊で意識を取り戻し、私塾の鮮士敏に救助されて勉學に勵む。一方、詹廷芳は金平と自身の結婚を認める段中祥からの偽手紙を作成して皮府を訪れ、金獅墜は段府を恨む卞松亭から譲り受けたと嘘をつき、結婚を申し込む。皮學臺は話の眞偽を確かめるため、卞松亭の亡靈を登場させる芝居を打つと、詹廷芳は卞松亭の殺害を認めた。金平と銀平は卞松亭の死を知り泣き崩れる。ある日、白歩雲は助けた金龜から、萬病に効き、死者も甦る金硃を授かる。皮學臺の娘の金容は急病で命を落とすが、金硃の奇跡で生き返った。大喜びの皮學臺は白歩雲を金容と結婚させる。金平と銀平は半年ぶりに歸郷し、家族は再會を果たす。その後、卞松亭が實は生きており、科擧を狀元で合格したと、皮登臺も探花で合格したという知らせを受け、

紆餘曲折の末に大團圓を迎えた。(以上『金硃縁』)

◎『雙上墳』(9)と『後雙上墳』(5)

河南省南陽府の趙廷輔の娘の瑞珠と黃文富の息子の聯書は結婚の約束をしていたが、黃聯書が夭逝し、絶望した趙瑞珠も縊死する。その頃、葛子謙という人物が南陽府の南樓で勉強に勵んでいた。南樓はかつて周廷章に裏切られて縊死した王嬌鸞の妖魔が現れるという噂があり、果たして葛子謙の前に王嬌鸞が姿を現す。葛子謙は戀煩いに罹って衰弱し、息子の話を聞いた母の陳玉蘭は、城隍殿を參拜して南樓の妖魔退治を訴える。天界では訴えを受けて生死簿を調べると葛子謙は七十二歳まで生きるとある。また、王嬌鸞は葛子謙と前世姻縁があるようだが、死者と生者の陰陽婚は難しい。そこへ死んだばかりの黃聯書と趙瑞珠が現れる。彼らは秦雪梅と商霖の生まれ變わりで、黃聯書は十六歳で天壽を全うする運命だった。そこで趙瑞珠の肉體が埋葬される前に王嬌鸞の魂を乗り移らせて、葛子謙との姻縁を成就させることにする。このお告げを聞いた陳玉蘭と葛子謙は趙府へ向かい、葛子謙は趙瑞珠の身體に借屍還魂した王嬌鸞と結ばれる。その後、葛子謙は科擧を探花

で合格し、陳玉蘭と趙瑞珠の事績は世に稱えられた(以上

『雙上墳』)

黃聯書と趙瑞珠の魂は三世姻縁を全うするため、方玉琴と張氏夫妻の息子の方文魁と娘の方鳳麟として轉生する。ところが、二人は方玉琴の惡事の因果を背負い、三歳の時に水難事故に遭う。方文魁は綿商人の周寅宗に救助され、周子昌と名付けられる。行商に同行するも途中で父が急逝し、文在傍の家に引き取られる。方鳳麟は米商人の蘆青雲に救助され、蘆三鳳と名付けられて才色兼備の自慢の娘に育つ。ある日、蘆青雲が文在傍の家に米賣りに訪れ、庭掃除をする周子昌を見ると、右腕に蘆三鳳と同じ印がある。前世姻縁を感じ、また息子と勘違いして縁談話をする、文在傍と甥の宋坤林は、周子昌を蘆家に遣り、蘆三鳳を連れて來た後、實子の醜く愚かな文眞華と結婚させようと謀る。周子昌と宋坤林は蘆家を訪れたが蘆三鳳の持病が悪化したため、二人だけ先に歸ることになる。途中で宋坤林は周子昌が蘆三鳳から結婚の證として受け取った金指蓋を見て盜心を起こし、周子昌を毒殺し河に遺棄する。文在傍は宋坤林の惡事を知らず、蘆家が他家との縁談を進めるために周子昌を殺したと太康縣に訴え、蘆青雲は處罰され、文

眞華と蘆三鳳の結婚を認める判決が出る。蘆三鳳と母は判決を不服とし、清官で名高い陳州府の葛子謙に訴える。實は、葛子謙は陳州への赴任の途中で周子昌を救済し、息子の葛文龍と面倒をみていた。ここに宋坤林の悪事が明るみとなり、文在傍は罪滅ばしに公共事業の寄付で功德を積むと、奇跡で文眞華は才色兼備に變貌し、後に、周子昌は状元、文眞華は傍眼、葛文龍は探花で科擧に合格した。葛子謙の妻の趙瑞珠は王嬌鳳が借屍還魂したもので、周子昌と蘆三鳳は、黃聯書と趙瑞珠の魂が方文魁と方鳳麟に生まれ變わり、一度は離れ離れになったが、それぞれ右腕と左腕の珍珠印の加護により、その姻縁は成就した。(以上『後雙上墳』)

①『定國珠』(10)と『仙鶴縁』(6)

陝西省西安咸陽縣の胡天善には三人の娘がおり、長女の胡桂春は武傍進士の張廷見、次女の胡桂蓮は武解元の李洪占、三女の胡桂苑は王文俊と夫婦である。王文俊の家は貧しく、胡桂苑は實家に借金を頼むが、嫌貧愛富の父親に斷られ、二人は山で薪を採り、綿を紡いで生計を立てている。胡天善の六十歳のお祝いの日、親族が集まる中、胡桂

苑と王文俊が貧しい身なりで屋敷を訪れると、裏口から馬小屋と厨房に通され、面會を斷られ、長女夫婦からは辱めを受ける。次女夫婦は不憫に思い、李洪占は王文俊に銀を、胡桂蓮は胡桂苑に釵を渡す。二人はそれを元手に田畑を借り、苦心して農耕を行う。様子を知った玉帝は、金磚と銀磚と定國寶珠を授ける。王文俊はそれらを地中から發見し、朝廷に獻上すると、皇帝から「進寶狀元」を賜った。世話になった李洪占も後に武狀元となり胡天善と張廷見は恥じて言葉もなかった。(以上『定國珠』)

王文俊と胡桂苑は、夢で息子の汝興は金身羅漢の生まれ變わりで、佛門修行が未了のため修行を終えたら戻ると告げられる。目覺めると汝興の姿は消えていた。さて、河南省汝寧縣西平鎮の周文遠と妻の桃氏には聰明な娘の周玉香と下女の宿金印がいる。周文遠が山東省清平縣での任務を終えて故郷への歸途、周玉香と宿金印は船を降りて參拜した高山寺で老婆に呼び止められる。老婆は羅帕が手繰り寄せる縁について語ると飛び去り、一對の仙鶴が刺繍された羅帕が残された。すると、その羅帕が突然舞いあがり、寺で修行していた王汝興のもとに落ちる。それを見た二人は王汝興に羅帕の因縁を語り、船に誘い、銀を渡し、還俗し

て官吏となり結婚することを約束させる。銀を受け取った王汝興は、歸る途中で足を滑らせて河に轉落し、湖北省宜昌に赴任途中の王文俊に救助される。王文俊は救助した僧の話を聞くうち、生き別れの汝興ではないかと疑い、妻と僧の中指に針を刺し、水鉢の中に血を混ぜると、合わさって珠となった。滴血認子の方法で親子であることが証明され、三人は再會を喜ぶ。一方、周文遠は娘たちの事情を知らず、山東で知り合った袁風慶の息子袁文龍との縁談を決めてしまう。後日、宜昌府臺の息子として王汝興が結婚の挨拶に周府を訪れると皆は大喜びするが、二つの家には嫁がない。そこで宿金印を義女に迎え、周鳳香として袁家に嫁がせることにした。ところが袁文龍はそれを拒否し、虚偽の縁談を仕組まれたと河南省開封府に提訴する。周玉香は訴訟の取下げを要求し、兩家に詫びる血書を残して縊死し、その知らせを聞いた袁文龍も死んでしまう。すると、周玉香には老婆の羅帕が、袁文龍には周鳳香が刺繍した羅帕が舞い落ち、二人は息を吹き返す。羅帕の奇跡を聞いた開封府臺は、袁文龍に周鳳香を娶らせた。王汝興と袁文龍は状元となり、すべては天界の因縁により大團圓を迎えた。(以上『仙鶴縁』)

㊦『風水亭』(7)と『陰陽鏡』(8)

咸豐年間の話。西陽州彭水縣の花廷欽と李氏には花上品と花上雲という二人の息子がいる。花廷欽は偽銀で私腹を肥やしたが、花上雲の散財に遭い、心勞で死去する。法事が済むと、柳氏は花府に竹元進の娘の竹金蘭との縁談話を持ち込む。花上雲は竹金蘭を密かに見て氣に入り、柳氏に話を進めるよう頼むが、金蘭が病に罹り、治るまで保留となる。ある日、竹元進は雨宿りした祠堂で、縊死しようとする白玉生に出會う。聞けば湖北省巴東の出身で、太平天國から逃れて來たという。竹元進は白玉生に祠堂の管理を任せる。金蘭の病は益々重くなり、兩親は祠堂で願掛けをする。すると土地神が竹氏夫妻と白玉生の夢に現れ、白玉生に授ける靈符法術で病を治し、二人を結婚させるようにと告げる。果たして白玉生の符法で金蘭は快復し、二人は結婚した。一方、花上雲は金蘭が結婚したと聞いて驚き、柳氏に相談すると、白玉生の殺害計畫を提案される。時に、白玉生は、花上雲の叔父である夏時用に風水亭の私塾教師として招かれ、夏氏の娘の金容は白玉生を見て戀煩いに罹ってしまう。花上雲は白玉生謀殺のため風水亭を訪れて酒席を開く。偶然通りかかった花上品も共に深夜まで飲

む。終宴後、歸ろうと表に出た花上品は、暗がり白玉生と取り違えた刺客に殺されてしまい、何も知らずそばを通った白玉生の衣服には血痕が付着する。翌朝、大騒ぎになり、白玉生に殺人の嫌疑がかかるが、夏金容は柳氏と従兄の花上雲の仕業に違いないと竹金蘭に手紙を書き、白玉生の冤罪を主張する。(以上『風水亭』)

手紙を受け取った竹金蘭と母は、柳氏と花上雲が犯人だと訴える。裁判官は訴えの眞偽を確かめるため、豫め墨を塗った二堂の靈官菩薩を準備し、竹金蘭と母、花上雲と柳氏には、偽りの心が無ければ觸れても跡はつかないとして菩薩を觸らせる。花上雲と柳氏は觸るふりで誤魔化そうとして、却って悪事が露見した。白玉生と竹金蘭は、夏金容の機轉に感謝し、また夏時用からの申し出を受け、夏金容を妾として迎える。

ある日、風水亭に妖狐が住み着く。白玉生が酒の勢いで、符法で妖魔も退治できると豪語したのを聞いた妖狐は腹いせを考え、花上雲の花園に移り住み、花上雲の腰帶を拾うと變身して夏金容のベッドに置き去る。白玉生は立ち去る花上雲(實は妖狐)の姿を見かけ、寢室で腰帶を発見し憤慨する。不貞の嫌疑をかけられた夏金容は血書を残し

て縊死し、冥界で無實を訴え、白玉生も被告として假死状態で連行されたが、「陰陽鏡」で花府の妖狐の仕業だと判明。妖狐は白玉生の狂言に乗った罰として、深山で修行に勵むことになる。一方、夏金容と白玉生は前世姻縁を全うするため現世に戻された。夏金容は冥界で出會った叔父の花欽定が、生前の悪事により鎖に繋がれ責苦を受けていたのを憐れみ、叔父に代わって功德を積む。白玉生は夏金容に詫び、元の鞘に収まった。(以上『陰陽鏡』)

四、興順堂作品の特徴

(1) 主なプロット

前章の梗概から一目瞭然だが、①から⑧の作品はすべて男女が紆餘曲折を経て結ばれるという内容で、主に以下のプロットから成る。(一)主人公が河に流されるも(謀殺され遺棄、誤って轉落、絶望して投身)途中で救助される。血書を残して自縊するも生き返る。(二)物語の展開を支える品(「冰霜鏡」、「金獅墜」、「金指蓋」、「羅帕」、「陰陽鏡」)が登場し、それぞれ婚姻の證明、潔白の證明、奇跡の出現など大事な役割を果たす。(三)男主人公は科擧に首席もしくは三位内に合格する。(四)殺人容疑、婚約不履行など

による訴訟と冤罪の證明。(五) 男女の縁は天の定め、前世姻縁。これらはすべて通俗文藝作品でお馴染みの要素であり、清末の四川においても同工異曲の説唱本作品が次々と創作されたことが分かる。

また、作品本編の前後に作者による物語の簡単な總括、関連作品や下巻の紹介、新作の宣傳などが付記されることも、當時の四川および周邊地域で出版された説唱本の特徴の一つである。²³ 以下の(2)(3)では『五英配』と『望月樓』の付記を中心に考察する。

(2) 作者による本編前後の挿入文

『五英配』の上巻『杏花樓』の末尾を以下に挙げる。(引用文中の括弧内は筆者による加筆)

：林長弟兄未曾對、灣灣曲曲來相逢。京殿受封五英配、鸞鳳和鳴各稱奇。銀棠繡圖八仙會、姨母祝壽禍不離(『八仙圖』)。瓊瑤血滴金盤內、四下河南會包爺(滴血珠)。瑞珠上墳情義美、借屍還魂把生倍(『雙上墳』)。竹氏雲英含血粹、現出冰心萬古垂(『冰霜鏡』)。幾個才女是一類、心胸才情比得誰。聽說這本團圓會、冰霜寶

鏡又作爲、做書苦把心血費、散淡逍遙即下回。下卷冰霜鏡。

「林長兄弟は紆餘曲折の末に再會し、皇帝から五英配を封じられ、仲睦まじい夫妻は奇跡と稱された」と下巻の結末を先行して述べた後、『八仙圖』『滴血珠』『雙上墳』『冰霜鏡』の女主人公である趙銀棠、趙瓊瑤、趙瑞珠、竹雲英を挙げて、素晴らしい心根を持つ才女だとし、『五英配』の大團圓が知りたければ、心血注いで創作した下巻の『冰霜鏡』を読むようにと宣傳する。『八仙圖』『滴血珠』『雙上墳』は、いずれも清から民國期にかけて出版された四川説唱本が現存し、それぞれ續編『後八仙圖』『後滴血珠』『後雙上墳』もある。また、四川だけでなく湖南、貴州、雲南の説唱文藝や地方劇を介して廣く流布しており、²⁴ これらが當時の四川および周邊地域において人氣作品だったことは想像に難くない。『八仙圖』は、夫の韓文玉と生き別れた趙銀棠が、難を逃れて姨母の家に身を寄せたが、姨母の誕生祝いの席で従兄の羅文孝に結婚を迫られ、貞節を守るため河に身投げするも、劉尚書に助けられて養女となり、後に状元となった韓文玉と再會し、探花となった羅文孝は

劉尚書の娘と結婚し大團圓を迎えるという内容で、『滴血珠』は、四川の趙瓊瑤が父親を謀殺した犯人を暴くため、難に遭いながら三度にわたって河南の包公を訪ね、ついに無念を晴らす、流浪の旅をつづけた趙瓊瑤の貞節を疑った古成壁に縁談を断られ、四度目の河南行きで（四下河南）、包公の立ち合いのもと自身の潔白を「滴血成珠（血を水鉢に垂らして珠になれば處女である）」の方法で証明するという内容で、『五英配』や『冰霜鏡』とプロットや要素を共有していることが分かる。

とくに『滴血珠』の物語は影響力が大きかったと思われる、説唱文藝や地方劇以外に、後に宣講の案證としても採用され、「滴血成珠」という題目で宣講書にも収録され、民國期にかけて湖北、湖南、四川、重慶を中心に出版され、流通した。⁽²⁾『冰霜鏡』において竹雲英が自身の「冰心（純潔）」を訴える場面で「部堂聽他之言、想起包文正斷古成碧趙瓊瑤之事也（部堂は竹雲英の話を聞くと、包文正が古成碧と趙瓊瑤を断じた事件を思い出した）」、「昔年有一包文政、鐵面無私不容情、趙氏瓊瑤含血噴、四下河南告古成（碧）、狼心不把妻來認、仗他身榮稱威能、可憐瓊瑤泪滾々、遇着包公變冤情、設棹焚香把神敬、滴血成珠在金盆、雲英

與他一樣命（昔、包文正は公正無私で情け容赦のない人物だった。趙瓊瑤は血を吐く思いで、四度目の河南行きで古成壁を訴えた、殘酷に妻を認めないのは、自身の榮譽と權威のため、憐れな瓊瑤はしとど涙を流したが、包公に出會って無實に變わり、香を焚いて神を祀り、滴血は金盆の中で珠となった、竹雲英も趙瓊瑤と同じ運命）」と、『滴血珠』の内容が取り入れられたのも、當時の四川で人口に膾炙した物語だった故だろう。また、『滴血』は血縁（親子・兄弟・夫婦）を識別する方法としても古くから傳わり、南宋・宋慈『洗冤集録』卷三の「檢滴骨親法」や孟姜女故事、現代の武俠ドラマなどでも知られる。興順堂の『仙鶴縁』にも「滴血認子」の方法で生き別れた子供を確かめる場面があり、そこでは「若是我子汝興、兩血成珠（もし我が子の汝興であれば、二人の血は一つに融け合い珠となる）」、「二家針血滴在盆内果然成珠了。夫人叫道我的痛心兒哪。父子娘母一場大哭。（針で刺して垂らした二人の血は、果たして水鉢の中で珠となった。夫人は「私の可愛い息子よ」と叫び、親子は大いに泣いた。）」と描かれており、「滴血」という俗信が當時は一般的なのであったこと、また俗信の流布の背景に、説唱本の出版・流通が多少なりとも關與していたことがうかがえる。

さて、周廷章の裏切りに遭い縊死した王嬌鸞の魂が「借屍還魂」の方法で趙瑞珠の死體に還り葛子謙と結ばれる『雙上墳』については、先ほどの『五英配』下巻だけでなく、次に挙げる『望月樓』の冒頭文にも登場し、『藍橋汲水』（魏魁元と藍玉蓮は水を求めたのが縁で、藍橋での逢瀬を願うも洪水で命を落とす）、『陳姑趕潘』（陳姑が潘必正の漁船を追いかけ離別の悲しみを訴える）、『玉蜻蜓』（尼の志貞は戀仲になった貴昇に先立たれ、生まれた子とも別れるが、子に遺した玉蜻蜓が縁で再會した）と共に「婚姻は前世からの定めにより、紆餘曲折の末に自ずと成る」話の例として取り上げられる。

：婚姻嫁娶結朱陳、良縁前生有分定、灣灣曲曲自然成。子謙南樓縁有分、嬌鸞借屍還魂（『雙上墳』）。瑞珠連書三世聘、珍珠寶塔作把憑（『後雙上墳』）。玉蓮魁元苟合陣、藍橋汲水入幽冥（『藍橋汲水』）。陳姑趕潘江河等、魚船相會訴哀情（『陳姑趕潘』）。志珍（貞）姑娘迷了性、貴申（昇）公子玉蜻蜓（『玉蜻蜓』）。

王嬌鸞と周廷章の逸話は『情史』卷十六や『警世通言』

卷三十四「王嬌鸞百年長恨」で知られる。蘇州の周廷章が父の赴任先の南陽で出會った王嬌鸞と將來を誓うも、故郷に戻って別の女性と結婚し、絶望した王嬌鸞は自縊したが、四川説唱本では非業の最期を遂げた王嬌鸞の魂を救済するべく、「借屍還魂」で現世に還す『雙上墳』と續編『後雙上墳』が興順堂から制作・出版され、翻刻を経て民國期まで長く愛讀された。⁽²³⁾例えば、『五英配』において、科舉に向かう婚約者に、かつての出世を機に心變わりのした男たちになるなど忠告する場面、その代表例として「陳世美と秦香蓮」「蔡伯皆と趙五娘」「劉知遠と李三娘」「薛平貴と王寶釧」「王魁と焦桂英」と共に「周廷章と王嬌鸞」が挙げられたのも、自社出版の『雙上墳』『後雙上墳』を意識してのことかもしれない。なぜなら、『陳姑趕潘』で陳姑が潘必正に同様の忠告をする場面では「陳世美と秦香蓮」「蔡伯皆と趙五娘」「劉知遠と李三娘」「薛平貴と王寶釧」の四組を挙げるのみだからである。⁽²⁵⁾説唱文藝における裏切り夫の類型については詳しい調査が必要だが、いずれにせよ、王嬌鸞故事の演變を考察する上で、四川説唱本は一つの資料となるだろう。

『藍橋汲水』『陳姑趕潘』『玉蜻蜓』もすべて四川説唱本

が現存⁽²⁶⁾し、各地の説唱文藝や地方劇などを介して全国的に流布した物語である。⁽²⁷⁾ちなみに『藍橋汲水』の物語は、説唱本では藍橋で結ばなかった主人公が『玉堂春』の男女に轉生する（逆パターンもある）という内容で流布したが、地域によって主人公の名前が異なり、四川や湖南説唱本では『望月樓』の冒頭文と同じく「魏魁元と藍玉蓮」、北方鼓詞では「魏公子（魏景元）、藍瑞蓮」、上海石印説唱本では「韋郎保と賈玉貞」などとなっている。⁽²⁸⁾ここから、劉興順は明らかに四川で出版された『藍橋汲水』のテキストを参考に『望月樓』を執筆したことが分かる。また、現世で結ばれなかった男女が何度も轉生して姻縁を全うするのは、『後雙上墳』でも「趙瑞珠と黃聯書の三世姻縁」が描かれるように、清末民國期の説唱本（に限らずだが）では常套の手法であった。劉興順は、當時の四川で流行し、またテキストとして流通していた作品からアイデアを借用し、定番のプロットを踏襲しながら、意欲的に新しい作品を生み出し、自前の興順堂を經營していたと言えるだろう。

(3) 新作の宣傳文

最後に、『五英配』の下巻『冰霜鏡』と『望月樓』の下

神原文庫所藏清末四川説唱本の興順堂刊本について（山田）

巻『金珠印』の末尾に付記された新作の宣傳文から、興順堂作品の出版順を確認したい。まず、『五英配』と『望月樓』に先行して『雙上墳』がある程度の人氣作として出版されていたことは、(2)で取り上げた付記からも明らかである。また、『冰霜鏡』の末尾には「五英圖書給以完、好賢君子帶本觀、看言操語見識淺、須然話醜埋以端、目下臺本好公案、望月樓來才新鮮。（『五英配』が完成した、立派な君子がご覧になれば、言葉も拙く、見識も浅く、醜聞だが正しさと隠れている、目下、面白い公案物、『望月樓』が目新しい）」と宣傳が打たれ、『望月樓』の下巻『金珠印』の末尾には「……做有玉翠殊一本、更比這本還有情、完了。（……新たに作った『玉翠殊』は、この『望月樓』よりもっと面白い。おしまい。）」と記された。残念ながら『玉翠殊』は現存しないが、ここから、先ほどの『雙上墳』と合わせて、六作品については、『雙上墳』『後雙上墳』『五英配』『冰霜鏡』『望月樓』『金珠印』の順番で執筆され、出版されたことが分かる。

五、おわりに

神原文庫所藏の清末四川説唱本三十種のうち、稀見資料と言える同治年間に劉興順によって興順堂から創作・出版

された説唱作品八種とその関連作品二種を取り上げ、各種テキストの書誌調査、作品内容の分析を通して成書について考察した。

興順堂刊本の作品は、男女が紆餘曲折の末に結ばれるという通俗文藝作品では定番の展開を基本に、次々と量産された。また、創作において注目されるのが、當時、四川を中心に湖南、貴州、雲南の周邊地域において、地方劇や説唱文藝など各種媒體で流布した人氣作品『滴血珠』『八仙圖』『藍橋汲水』などの影響を受け、それらを巧みに自身の作品に採り入れたり、獨創的な王嬌鸞故事『雙上墳』を編み、四川を中心に新たな流行を築いたり、いずれも讀者の關心をひくためと思しい様々な工夫を凝らしていたことである。そのほか、物語本編の前後の挿入文で、新作や関連作品の宣傳を盛り込んで讀者の購買意欲を促す工夫を講じたのも、當時の四川および湖南など周邊地域の説唱本出版においてもよく見られる特徴であった。⁽²⁹⁾ 書肆によるこのような創作・出版の姿勢は、地域を跨いで共有されていた出版文化であったことも大變興味深い。

神原文庫に所藏される清末四川説唱本の新資料の發見は、これまでの四川説唱本研究の成果を補うだけでなく、

清末民國期の内地地域の説唱本研究を深化させる上でも大きな價值があると言えるだろう。

本研究はJSPS 科研費 JP18K23126 助成を受けたものです。

注

(1) 岩田和子「香川大學附屬圖書館神原文庫所藏の清末四川説唱本について」『東京女子大學 日本文學』第百三十號、二〇一七年三月十五日

(2) 高野眞澄「香川大學附屬圖書館藏『神原文庫』と神原甚造先生」『香川法學』第一〇卷第三・四號、一九九一年

(3) 神原文庫藏書目録編集委員會編輯『神原文庫分類目録』風間書房、一九六四年、香川大學附屬圖書館編集『神原文庫分類目録(續)』香川大學附屬圖書館、一九九四年、參照。

(4) 劉效民『四川坊刻曲本考略』中國戲劇出版社、二〇〇五年

(5) 注四前掲書所收「四川坊刻曲本知見録」では、曲本のうち「説唱篇」を更に「一、四川道琴」「二、四川評書」「三、佛曲、連霄、車車燈、雜調小曲及其他」に分類して作品を收録する。しかし説唱作品のジャンルの分類は一定ではなく、例えば、黃仕忠氏は注六後掲論文で「唱本」と總稱し「這些唱本的内容多爲戲曲與俗曲」と述べるのみである。また、本稿で取り上げる『定國珠』に關して言えば、劉復・李家瑞等編『中國俗曲總目稿』では特定のジャンルに分けず、『俗文學叢刊』で

は「鼓詞」に分類し、注四前掲書では劉氏は「四川評書」に分類する。そのほか、劉氏が「四川評書」に分類した説唱作品が、譚正璧・譚尋編『彈詞斂録』（上海古籍出版社一九八一年）には「彈詞」として収録されている。

- (6) 黄仕忠「雙紅堂文庫藏清末四川「唱本」目録」（『東洋文化研究所紀要』一四八冊、二〇〇五年十二月）が發表されて以降、中國では雙紅堂藏本の川劇演目に關する研究が數多く行なわれている。

- (7) 注四前掲書所收「四川坊刻曲本書業考」一〇四頁參照。劉氏が整理した二千種餘りのテキストのうち、道光、咸豐、同治年間のテキストはわずか十餘種に留まる。

- (8) 注四前掲書所收「四川坊刻曲本書坊名録」十五〜五一頁參照。

- (9) 岩田和子『湖南説唱本研究』（博士論文、早稻田大學、二〇一五年七月）

- (10) 詳細な情報は注一前掲論文參照。

- (11) 雙紅堂文庫所藏の四川説唱本『雙金丹』は、封面に「興順堂 四十冊／新刻雙金丹／光緒三年吉月刻」とあるが、卷末に「光緒三年是月吉日劉興盛堂刊刻」と記され、ここから、興順堂は光緒年間には劉興順から劉興盛に經營が移っていた可能性も考えられる。

- (12) 戴均良等主編『中國古今地名大詞典』上海辭書出版社二〇〇五年など參照。

- (13) 『雙上墳』は⑨以外に民國八年十八梯森隆堂刻本、民國十九

年重慶學院街文華堂書局刻本、民國二十六年成都萬古書莊刻本、民國三十三年重慶石明山書店刻本がある（注四前掲書二九五、二九六頁參照）。『定國珠』は⑩以外に民國十三年刻本、民國十七年熙南書社刻本がある（注四前掲書二九二、二九三頁參照）。

- (14) ただし、別の作者が執筆し、別の書肆から出版された『雙上墳』『定國珠』をもとに、劉興順が下卷を作成した可能性も無くはない。

- (15) 注四前掲書所收「四川坊刻曲本書坊名録」では長興堂の活動時期を光緒三十一年から民國二十四年と推定するが、雙紅堂文庫には光緒元年と光緒十八年の長興堂刊本があることから、長興堂は光緒前後から民國期にかけて活動した書肆と言える。

- (16) 注四前掲書四一頁參照。

- (17) 注四前掲書「四川坊刻曲本書業考」一〇四頁および劉功榮「成都的川劇木刻唱本」『成都志通訊』一九九〇年第一期、總第二十四期參照。

- (18) 注四前掲書「四川坊刻曲本書業考」四〇九頁參照。

- (19) 注四前掲書「四川坊刻曲本書業考」四〇九頁參照。

- (20) 注四前掲書、注九前掲論文參照。

- (21) 『八仙圖』の主な説唱本テキストは以下のとおり。道光二十五年成都榮桂堂刻本、光緒十五年成都永興堂刻本、民國年間金誠書社刻本（以上、注四前掲書七四頁參照）、民國二十四年新都鑫記書莊刻本、民國年間重慶張金山刻本、民國年間新都

福記刻本、民國年間新都和記刻本、成都和記刻本（以上、注四前掲書二八六頁參照）。合州鍾明揚刻本、出版地不明の義盛堂刻本（注五前掲書『彈詞敘錄』一二三頁參照）。長沙左三元堂刻本（姚逸之、鍾貢助述『湖南唱本提要』一九六九年復刊、三・四頁、謝玉芳「國立中山大學人類學部收藏湖南說唱本的發現與提要」中山大學碩士學位論文、二〇〇八年參照）。そのほか、湖南の衡陽、邵陽、辰溪の漁鼓演目（『中國曲藝志・湖南卷』新華出版社、新華書店經銷、一九九二年、一七七頁）、貴州の青岩唱書演目（『中國曲藝志・貴州卷』中國ISBN中心、新華書店北京發行所經銷、二〇〇六年、六九頁）、雲南の善書傳統演目（『中國曲藝志・雲南卷』中國ISBN中心、新華書店北京發行所經銷、二〇〇九年、一二九・一二〇頁）として『八仙圖』が収録され、演劇（前掲『彈詞敘錄』一二三頁參照）、川劇などにも演目がある。『滴血珠』は四川、湖南、貴州、雲南で出版された說唱本テキストが現存し、地方劇は楚劇、常德花鼓戲、陽戲、祁劇、辰河戲、武陵戲、演劇、高甲戲、盧劇、京劇などに演目があるが、詳しくは拙稿「『滴血珠』故事說唱流通考―清末民初の說唱本と宣講書を中心に―」（『稻畑耕一郎教授退休記念論集 中國古籍文化研究』東方書店、二〇一八年三月）を參照されたい。なお、當時の調査では光緒三十一年年合州榮生堂刻本『滴血珠』が出版年の分かる最も早い說唱本テキストだったが、「孔夫子舊書網上」で咸豐七年の四川說唱本と思しき『滴血珠』の畫像を確認したのでここに付記する（二〇二〇年十一月二日最終閲覧）。『雙上墳』は注一〇

のテキストのほか貴州の黔北草書、安順民間唱書に演目がある（前掲『中國曲藝志』貴州卷、一二四頁）。

- (22) そのほか、清末から民國期にかけて上海の多くの書肆から陸續と石印本が出版され、廣益書局、上海鴻文書局からは活字本も出版された。宣講書に關する詳しい研究は、阿部泰記『宣講による民衆教化に關する研究』汲古書院、二〇一六年參照。

- (23) 注一三參照。

- (24) 「……木蘭英坐小房思存嗟嘆、想起了幾古人名傳世間。陳世美招附馬必腸改變、秦香蓮到京華不忍舊園。蔡伯皆占鰲頭牛氏陪伴、趙五娘剪髮賣甚是慘然。劉知遠去汾州招贅來轉、李三娘守磨房一十八年。薛平貴在西涼稱王讚嘆、王寶釧坐寒窯受盡艱難。還有那周廷章居心不善、耽悟了少年妻王氏嬌鸞。□王魁他不義做事短見、焦桂英海神打□伸冤」（同治三年興順堂刻『五英配』十八葉b）

- (25) 「陳世美做高官良心改變。不認他結髮妻也是枉然。劉智遠去并州一十六載。李三娘在磨房受苦熬煎。薛平貴他道有宮主代戰。寒窯內哭壞了王氏寶川。蔡伯陪他也有牛氏陪伴。苦了那趙五娘剪髮賣錢。」（益陽市郵局對門華文錦代印『陳姑趕潘』八葉a、早稻田大學藏）。なお、四川說唱本の原本を確認することができなかったため、湖南說唱本を確認した。

- (26) 『藍橋汲水』は、民國二十四年成都三合堂刻本、民國年間古臥龍橋源記批發刻本（注四前掲書一五〇、一五一頁）、源盛堂刻本（上海圖書館藏）がある。『陳姑趕潘』は三百八木刻本

(注四前掲書九三頁)、『玉蜻蜓』は光緒十八年合州文茂堂刻本、民國三十年重慶雙和書店批發刻本、光緒三十年邛州萬□堂刻本、民國二十三年重慶張金山刻本、宣統二年東嶺閣刻本、民國年間成都娘廟街十七號玉記批發刻本、成都古臥龍橋刻本、民國成都協記書莊刻本、民國三十二年重慶雙合書店刻本、民國三十五年重慶明山書店藍印刻本などがある(以上、注四前掲書二四一—二四五頁参照)。

(27) 『藍橋汲水』關連の説唱テキストに、寧鄉綿芳堂光緒三年刻本(浙江圖書館、首都圖書館等藏)、奉天東都石印局石印本(『鼓詞彙編』瀋陽市文學藝術工作者聯合會編、一九五七年)、北平中華書局排印本(雙紅堂文庫藏)、北京學古堂排印本(早稻田大學圖書館藏)、上海文益書局石印本(上海圖書館藏)などがある。詳しくは注二八参照。『陳姑趕潘』は益陽華文錦刻本(早稻田大學、上海圖書館等藏)などがあり、『玉蜻蜓』は、鼓詞、寶卷、潮州歌、京劇、演劇、閩劇、婺劇、常錫劇、黄梅劇、紹興高腔、豫劇、評劇、推劇、漢調二黃、泗劇、川劇、越劇に關連演目がある(注五前掲書『彈詞鼓錄』一三九頁および盛志梅『清代彈詞研究』齊魯書社、二〇〇八年、四四四—四四八頁参照)。

(28) 『藍橋會』故事における主人公の轉生については、注九前掲論文「第三章 湖南説唱本と多世姻縁の物語」に詳しい。

(29) 注九前掲論文参照。

神原文庫所藏清末四川説唱本の興順堂刊本について(山田)

* *

作者：岩田 和子

Author : IWATA Kazuko

標題：關於神原文庫藏清末興順堂所刊四川説唱本

Title : On the Sichuan Shuochangben 四川説唱本、of the Kambara Collection published by Xingshun Tang 興順堂、in the Late Qing Dynasty

摘要：神原文庫は據日本香川大學第一任校長神原甚造の舊藏所成。在調査中、我們發現了三十三種清末民國年間の説唱本、其中三十種是清末四川説唱本。在這些四川説唱本中、同治年間興順堂所刻の八種《五英配》《冰霜鏡》《望月樓》《金珠縁》《風水亭》《陰陽鏡》《後雙上墳》《仙鶴縁》很有可能是除了神原文庫以外都沒有所收藏的作品。本文希望通過對這些稀見の説唱本進行整理與分析、考察當時四川説唱本の書肆情況、作品的內容特徵、並挖掘神原文庫所藏清末四川説唱本文獻價值。

關鍵詞：四川説唱本 湖南説唱本 唱本 曲本 神原文庫